



まちの“界限”分析 ～那古野地区に焦点を当てて～



いま、歴史まちづくりが注目を集めている。

その中でも、なんとなく歴史的情緒が漂う“界限”の重要性は認識されつつも、その実態や本質は定かではなく、政策ベースに乗りにくいという実情がある。そこで、当研究では那古野地区の住民を対象としたアンケートを行い、地区における“界限”の姿を把握するとともに住民の思いや考えを数値として把握し、定量的な分析を行うことで、住民意識を可視化することを試みた。

結果として、①. 四間道周辺、②. 那古野小学校周辺、③. 問屋街周辺 の3つの“界限”の存在が確認された。また、この地域の住民は、商店街や身近な緑、古い木造家屋が非常に重要と認識している一方で、高層建築物やコインパーキングなどに対してはあまり重要と考えていないことが明らかとなった。

まちの“界限”分析 ～那古野地区に焦点を当てて～

名古屋都市センター 調査課 岩田 悠佑

1. 調査研究の概要

1-1. はじめに

現在の名古屋市域には多くの古墳や熱田神宮などの歴史的資産が多く残されている。特に中心部は、清洲越を起源としており、当初の町割を基礎として今日に至っていることから、かつての歴史の名残を随所に見ることができる。

旧来より、名古屋の街は日本屈指の産業都市として第二次産業の育成に寄与すべく近代化が進められ、また、人口の増加に伴って市街地の拡大を続けてきた。しかし、その一方で自然環境や歴史的な町並みなどの情緒的側面は横へ下へと押しやられてしまったせいか、面白みのない都市として認識されがちである。

近年、日本全体では構造的な社会の成熟局面を迎え、まちづくりのあり方に関しても、都市基盤整備や機能性に主眼を置いた従来の方向性から、自然・歴史の保全や感性を重視した方向への転換が求められている。

こうした背景から、「歴史まちづくり」における総合的な法整備が望まれてきたが、ようやく2007年11月、「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」（以下、「歴史まちづくり法」という。）が施行された。この法律はこれまでの歴史まちづくり関連施策の間に横糸を通し、それぞれを補完する形で制定されたものであり、これからのまちづくりにおける一つの新機軸とも言えよう。

名古屋では、2009年6月、市長より広告・景観審議会に対して歴史的資産の活用について諮問を行い、ここで既存の歴史的建造物の保存・活用の方向性を提示されたが、その中で「歴史的界限」の位置付けとその保存・支援の必要性についても言及があった。また、こうした背景を受け、歴史まちづくり法に則った施策展開に向けて担当部署が新設された。しかし、長年にわたり歴史的資源をまちづくりに活かしてきた京都などとは違い、名古屋では積極的に歴史的資源の発掘や再評価からスタートすることが必要である。

本稿では、こうした「歴史まちづくり」の一助となるべく、「歴史的界限」について調査研究を進めていく。

1-2. 目的

歴史まちづくりに関する制度として、古都保存法、文化財保護法、景観法、都市計画法などに基づく制度が存在する。これらは、個別的に歴史的建造物の保存において、歴史的ファサードの継承などにある程度の貢献を認めることができるが、地域に醸し出されている生活に根付いた歴史的な雰囲気(歴史的界限)を保全する上で機能してきたとはいいがたい。今後、歴史的建造物の保全と、人々の生活の営みと歴史的資源との融和を目指す界限づくりとしての取り組みが必要である。

こうした現状を踏まえ、名古屋都市センターにおいても地域における歴史保全、とりわけ、歴史的情緒を残す界限性に関する調査研究を進めることとした。ちょうど時期を同じくして始動した大学と地域の連携を進めるプラットフォームとして「なごや縁カレッジ」が平成21年度に発足し、地域の“界限性”に着目した共同研究の体制がスタートした。

本調査研究で、人々の意識下にある“界限性”とはどのようなものか明らかにしてみたい。

1-3. “界限”とはなにか

一言で“界限”といっても、その意味するところが茫洋としていることから、既存資料等からその輪郭を明らかにしてみよう。

まず、“界限”の字義を確認するため辞書を参照すると、“界限”とは、「そのあたり一帯。付近。近辺。 用例：銀座～」(小学館：デジタル大辞泉より)とあり、特定の地名と組み合わせることで、その地点のみならず周辺一帯を含む空間的な広がり表現する語であることがわかる。”界限”が敢えて境界線を明確に区分し得ない空間的広がりであることから、“～界限”と表現したとき、そのイメージする空間的範囲は、受け手としての個人ごとに微妙に異なっているかもしれない。

伊藤ていじは、「日本デザイン論」の中で、「界限空間」は日本独自のものであり、旧来より馬車での移動利便性を前提として規格性の強い都市計画を進めてきた西洋には存在しなかったことや、その空間構成は、施設とその集積から引き起こされる人間の行動によって規定される

このように、“界限”とは一定の物理的空間における人の集まりや行動により構成されるものであるらしいことが分かる。また、それは事前決定的ではなく、人々の普段の生活の営みを通じて自然発生的に形成されるものであると思われる。

実際に“界限”の究明にあたっては、具体的な地域をモデルケースとしてその現況を把握し、そのうえで地域にかかわる人の考えや意識を分析することが必要である。また、“界限”の内容について調査するためには、どのような地域資源が核となっているかについても調べる必要がある。そこで、当研究では市が公表しているデータ等をもとに、地域の現状を把握した上で、アンケート調査を通して住民の意識から見える地域資源の重要度や“好きな場所”の分布の傾向を調査し、分析を進めることとした。

対象地区として取り上げるのは、名古屋市西部に位置する那古野地区である。この地区には、名古屋駅近傍にありながら堀川や四間道を擁し歴史的情緒に富むことから観光客も訪れるようになってきた。活況を呈しているとはいいたい、地元に根付いた古くからの商店街もあり地域主体のまつりも開催されている。

また、できるだけ多くの住民の回答が得られるよう西
区役所と提携し、区政協力委員の助力を得て実施した。

那古野地区は、名古屋城築城とともに堀川が開削され、物流の拠点として栄えた。当初は、美濃路の沿道として発展が続けたが、1700年の大火を契機に四間道が整備され、さらには1724年の大火を契機に円頓寺及び慶栄寺が現在の位置に移転し、門前町が形成された。

明治に入り、笹島に鉄道駅が開設されたことを契機に円頓寺通が発展し、円頓寺商店街が誕生した。以降、堀川以西の町では最大の盛り場となる。また、この地域で菓子製造業が営まれ始めたのも明治に入ってからのことである。

1945 年の戦災により円頓寺商店街は全焼するが、その後復興する。しかし、戦後については、市電の廃止や名鉄瀬戸線の撤退などにより、以前ほどの賑わいは薄れつつある。

高度成長期を経て、再開発が一部で進み、那古野ビルや国際センタービルが建設され、周辺にも高層建築物が見られるようになった。その一方では、町並み保存地区に指定され歴史的な雰囲気の残る地区もあり、特に四間道周辺では木造家屋が密集し、ある意味では開発から取り残された様相を呈している。

近年では那古野小学校の向かいに29階建てのマンション棟と24階建てのオフィス棟からなる名古屋プライムセントラルが建設されるなど、名古屋駅前地区の開発の波が押し寄せつつあるが、もう一方で木造家屋を活かした商業利用も進展している。

- 2 -

2-2. 土地利用状況

住宅地や商店街沿いでは低層の建物では4階までの低層の建物が多いが、幹線道路沿いでは5〜7階程度の建物が多く見られる。また、地区南西部の名駅近くになると古い木造家屋の立ち並ぶ街区においても、一部に8階以上の高層マンションなどが見られるようになり、土地の高度利用が進んでいる。

那古野学区内には狹隘道路が多く防災面での課題が残っており、また、公園がほとんどないため、公園等面積率、樹林地率が全市平均に比べて著しく低い。なお、学区内にある市指定の保存樹は南西部の浅間神社に数本残されている。

那古野学区は、都市計画マスタープランにおいて都心域としての位置付けがなされ、大半は商業系用途地域を指定されているが、北西部の菊井二丁目は準工業地域、北東部は近隣商業地域に指定されている。容積率についても、都市計画道路に面していない街区内は400%と抑制的であるが、都市計画道路沿いは500%、名古屋駅周辺や桜通沿いでは800〜1000%とされており、かなりの高度利用が可能となっている。

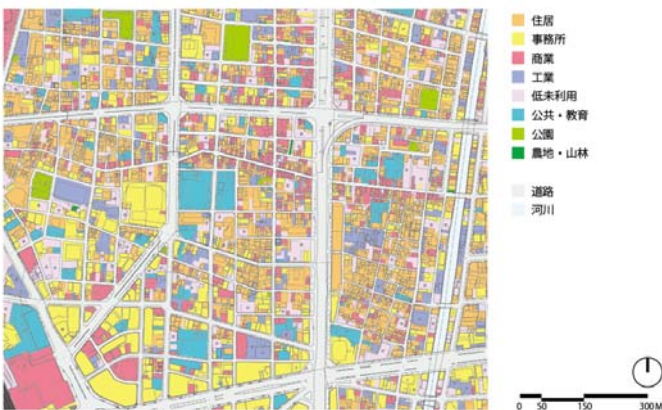


図2 建物用途現況図



図3 建物階高の状況

2-3. 地元のまちづくり活動

現在、那古野地区では、地域の企業や企業博物館、伝統工芸の職人、商店街、市民団体、大学など様々な主体による「ものづくり文化の道推進協議会」が結成され、この地域にまちづくり活動に取り組んでいる。

さらに、地元においては下記のような地元主体のまちづくり活動団体が設置されている。

(1). 那古野一丁目町づくり研究会

円頓寺商店街周辺に残る昔ながらの街並みや数々の名所・史跡の減少を危惧し、地元住民を中心に会が結成された。

古民家を利用した飲食店の経営や、商店街の活性化に向けた活動のほか、那古野地区での表札の作成・設置に取り組んでいる。この表札設置事業は、観光客の増加や地元住民に下町のルーツを認識してもらい、今後のまちのあり方に関心を持たせることを狙いとしており、名古屋都市センターのまちづくり活動助成を受けている。

(2). 那古野下町衆

円頓寺・四間道境界まちづくりプロジェクト ^{なごしゆう} 那古衆は縁側妄想会議編集室のメンバーをはじめ、円頓寺商店街、円頓寺本町商店街店舗の若手経営者、名古屋で活躍するクリエイター、大学関係者、学生、コンサルタント関係者など10代〜40代までの「円頓寺や四間道が好きな人」那古野地区の商店街の若い担い手を中心に結成された。

現在は、商店街における店舗誘致などのマネジメント事業や映画製作への協力、景観・秩序を保つためのルール作りなどに取り組んでいる。

(3). 縁側妄想会議編集室

円頓寺商店街や四間道で店舗を経営する3人の女性による季刊フリーマガジン「名古屋のあるくした街情報誌「ポウ」」の発行を通じて地域の情報を発信している。

「ポウ」には温かみのある手描きのエリアマップや、イベント情報、サービス付のショップ情報など、A5サイズの大きさにさまざまな情報が載っており、商店街で無料配布している。

3-1. アンケート調査

アンケートの具体的な内容とその狙いとしては、

①. 地域資源に対する認知度調査

…地域における寺社仏閣や歴史に関連するような特徴的な要素、旧町名などを列挙し、知っているものにチェックしてもらい、それぞれの認知度を数値化する。

②. 地域資源に対する重要度調査

…地域における歴史的資産(堀川、昔の地名、古い建物など)、物理的要素によるまちの雰囲気(超高層ビルの眺め、商店街、寺社仏閣など)、機能面から見たまちの構成要素(駐車施設、学校等の公共施設など)、人々の営みによるソフト的要素(町内会、近所づきあい、町おこしなど)について24項目を抽出し、これらの項目に対して重要度を1～4の数字として示し、これをチェックをもらうことで、地域資源の重要度を定量的に把握する。

③. 好きな場所の把握

…回答者が那古野学区周辺の地図上に対して、好きな場所を自由に囲んでもらうこととした。これを数値化し、好きな場所の範囲についてどの程度共通なエリアが浮き彫りにできるのかを分析する。

アンケート調査の実施内容は以下のとおりである。

調査日時	： 平成22年10月7日～31日
配布地域	： 西区那古野小学校の学区
対象	： 那古野学区内の町内会加入世帯に 属する小学校4年生以上 *1世帯につきアンケート用紙4枚配布
配布方法	： 学区連絡協議会の協力のもと、各町内 会ごとに各戸配布
配布世帯数	： 1,669世帯
回収数	： 690世帯(1,542通)：回収率41.34%

なお、このアンケート調査の分析にあたり、居住地域については、大きな通りを挟んでその地域性や住民の行動範囲が異なると考え、那古野小学校区を通る3本の都市計画道路によって学区を4つの地区に分けた。(図4)



図4

- ・北部 : 那古野小学校の位置する中部とは外堀通によって分断されている。菓子や玩具の間屋街があり、独特の風情がある。また、回答者に占める高齢者の割合が高い。
- ・西部 : 学区内随一の高層住宅である名古屋プライムセントラルが立地している。また、地区公園の早苗公園がある。
- ・中部 : 那古野小学校があり、その周辺には幼稚園や消防署など公共施設が多く立地している。建物の多くは住宅であるが、北には円頓寺本町商店街が東西方向にあり、また、南には近年多くの飲食店が出店している。
- ・東部 : 四間道や周囲の古い町屋群が立ち並び、東には堀川が、北には円頓寺商店街がある。歴史的資源が最も顕在的に残っている地域である。また、地域内の多くは低層住宅によって占められており、植栽などで軒先を緑化している家が多い。

3-2. 地域資源の認知度

調査地区内の歴史にかかわりのある事物に対し、回答者が知っているという割合（認知度）を整理し、表1にまとめた。この表から分かることを以下に概説する。

まず寺社仏閣の認知度については、平均すると45%程度であったが、大別すると4割程度の認知度があるものと、2割に満たない認知度しかないものの二通りに区分できるようだ。すなわち、四間道周辺や商店街沿道に立地するものについては40%弱以上の高い認知度が認められる一方で、そこから外れたところに立地するものについては20%以下の認知度しかない。とりわけ、円頓寺については100%近い認知度がある。金刀比羅神社、多賀宮など、商店街沿道にあるものについても認知度は高く、同様に、浅間神社や御本坊専修寺、子守地藏尊など四間道地区周辺にあるものも同様の傾向が見られた。また、敷地面積の大きな慶栄寺よりも路地にたたずむ子守地藏尊の方が認知度が高い一方で、北部地域に立地する隅田神社、崇徳寺、得生寺については軒並み認知度が低くなっている。こうしたことから、敷地・施設の規模よりも立地状況が住民の認知度に影響を与えていることがうかがえる。

有形の歴史的資産についても、認知度が7割以上のものと4割未満のものに二極化しているようで、その傾向は、先の寺社仏閣よりも強かった。認知度が高いものとしては、日常生活と関わりの深い円頓寺商店街、四間道、円頓寺本町商店街、駄菓子問屋、五条橋・擬宝珠、屋根神さまが挙げられる。一方で認知度が低いものとしては、山車、川伊藤家、美濃路、坪内逍遙住宅跡、小鳥町遺跡となっており、上述したものと比べると、日常生活に密着したものとは言いがたいものが多い。

次に、現存しない有形の歴史資産についてみると、こも知名度が4割を超えるものと、1割に満たないものの二極化が見られる。知名度の高いものは明治以降に成立し、昭和年間まで残っていたものであるのに対して、認知度の低い貞松院や養源学舎などは江戸時代のものとなっている。

無形の歴史的資産について、とりわけ高い認知度となっているのは円頓寺七夕祭りである。これは、この地域最大の祭であり、9割以上の回答者に認知されている。また、清洲越しは4割程度の認知度であり、地域の歴史に対する認知はあまり高くない。

最後に、旧町名について言えば、菊井町や明道町、新道町など現在も地名の一部に残るものの認知度が最も高くなっており、次いで五条町、沢井町、千歳町、藪下町などや町内会名として用いられているものの認知度が高い。一方で井桁町や比米町など現在は記録としてしか残されていないものについては認知度が低くなっている。

これらをまとめると、住民に認知されている歴史的資産の特徴としては、生活や行動の中で接点の多いことや、比較的近年まで現存したものであることが挙げられる。こうした点を考慮すると、歴史的資産と人々の日常生活との接点が資源を認識するうえで重要であることがわかる。

表1 地域資源の認知度

項目	0	20	40	60	80	100%
全体						
歴史(広義)						
歴史(寺社仏閣)						
旧町名						
寺社仏閣						
円頓寺						
浅間神社						
金刀比羅神社						
多賀宮						
御本坊専修寺						
子守地藏尊						
慶栄寺						
隅田神社						
妙真寺						
崇徳寺						
得生寺						
有形(現存)						
円頓寺商店街						
四間道						
円頓寺本町商店街						
駄菓子問屋						
五条橋・擬宝珠						
屋根神さま						
山車						
川伊藤家						
美濃路						
坪内逍遙住居跡						
小鳥町遺跡						
有形(現存せず)						
円頓寺劇場						
旧名鉄瀬戸線堀川駅						
開慶座						
貞松院						
養源学舎						
無形						
円頓寺七夕まつり						
清洲越し						
地藏盆						
那古野で詠んだ芭蕉の句						
旧町名						
菊井町						
明道町						
新道町						
五条町						
沢井町						
千歳町						
藪下町						
西藪下町						
裏塩町						
隅田町						
菊元町						
小舟町						
井桁町						
比米町						

3-3. 地域資源の重要度

(1). 全体的な評価状況とその動向

表2は重要度の高い項目の順にまとめたものである。重要の高いものとしては、商店街の存在、樹木や身近な緑、蔵や古い木造家屋などであり、日常生活で接している対象や歴史的なものであっても、この地区ならではの施設ではないものが多い。また、逆に重要度の低いものとしては、コインパーキング等の駐車施設、超高層ビル群の眺め、この地区の高層マンションやビルなどであり、この地区の風情に対して異質の要素を持つものが多い。

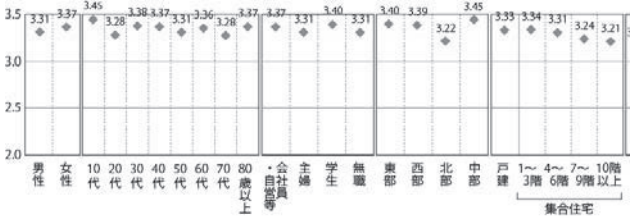
表2 地域資源の重要度

項目	評価値			
	1	2	3	4
全体	2.92			
商店街の存在	3.34			
樹木や身近な緑	3.16			
蔵や古い木造家屋	3.15			
お寺や神社	3.10			
学校やコミュニティセンター等の公共施設	3.09			
江戸時代から続くまち	3.09			
公園や広場など	3.06			
堀川	3.06			
学区としてのまとまり	3.05			
近所づきあい	3.04			
古くからのお祭り	3.00			
昔の地名	2.97			
お地蔵さまやほこらなど	2.91			
大きな木や神木	2.91			
町内会・子ども会などによる地域活動	2.89			
まちおこしなどの活動	2.86			
問屋街の存在	2.86			
雑誌やTVで紹介されること	2.82			
路地	2.79			
大通り	2.76			
伝統工芸品や名産品	2.72			
コインパーキング等の駐車施設	2.61			
超高層ビル群の眺め	2.57			
この地区の高層のマンションやビル	2.27			

(2). 項目別の重要度

ここでは、回答者の属性と数値化した重要度をクロス集計した結果を項目ごとに分析する。

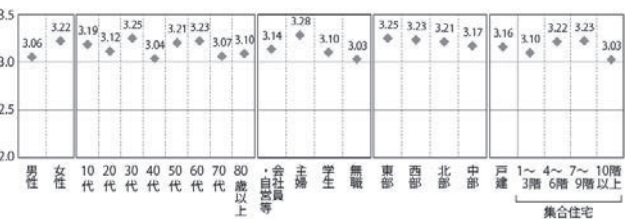
★ 商店街の存在



平均値は3.34であり、全項目中で群を抜いて高く、また、標準偏差も0.82と全項目中で最低である。回答者の大半の認識として商店街の存在が重要であるようだ。

居住地区別に見ると、北部地区のみがやや低い重要度となった。これは北部地区に商店街が含まれていない点や幹線道路がエッジとなり、心理的な距離感を形成していると推察できる。

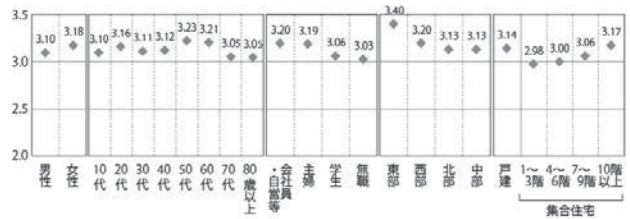
★ 樹木や身近な緑



平均値は3.18と全項目中で2番目に高く、「大きな木や神木」の項で取り上げた大規模な緑よりも、身近な緑のほうが回答者にとって重要であるようだ。

女性や主婦層にとっての重要度が高くなっているが、こうした傾向は「大きな木や神木」の分析結果にも見られ、概して女性のほうが男性よりも「緑」を重視していることが分かる。

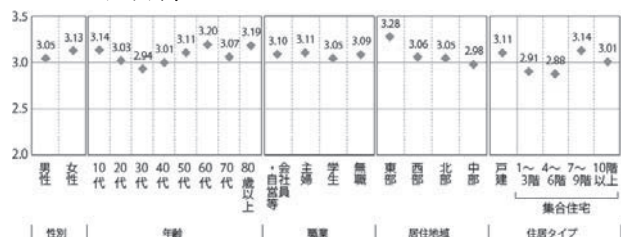
★ 蔵や古い木造家屋



平均値は3.15であり、全項目中3番目に高い重要度となっており、また、標準偏差も小さく、学区内に共通して重要視されているようだ。属性別に見ると、女性や主婦層が重要視している一方で、学生や高齢者の重要度は

低い。また、居住地域別に見ると、東部地区では特に高い値となっている。

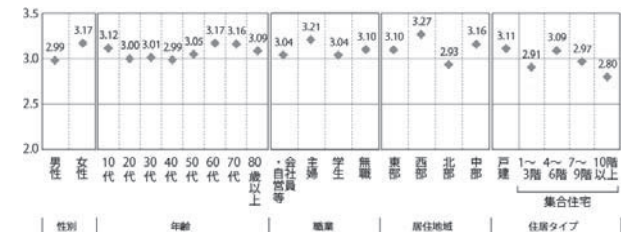
★ お寺や神社



平均値は3.09と高く、標準偏差も小さいことから、回答者全体として重要視されているようだ。

特に、学区内の寺社仏閣の多くが集中する東部地区が突出して高い重要度を示していることから、身近な寺社仏閣ほど重要と認識されている。

★ 学校やコミュニティセンター等の公共施設



平均値は3.09と高く、標準偏差も2番目に小さいことから、全体的に重要視されている。

また、学生の評価が低い一方、60代以上の評価が高くなる傾向があり、単に教育の場としての重要性だけでなく、地域生活の拠点あるいは原風景の対象となっていることがうかがえる。

★ 江戸時代から続くまち



平均値は3.07と高く、地域の歴史を重要視する傾向が見られる。

居住地別に見ると評価が高い順に東部＞北部＞中部＞西部となっている。歴史的資源の集積が見られる東部地区の値が突出して高い。次いで重要度の高い北部地区は、かつて繁栄した菓子関連の間屋街が現在も立地している。

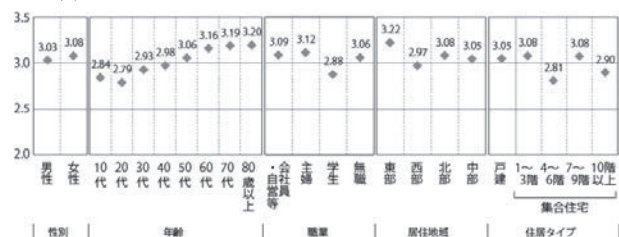
★ 公園や広場など



平均値は3.06と比較的高い。

居住地域別に見ると、東部地区での重要度が低く西部地区での評価が高いが、実際の公園やオープンスペースの分布状況に対応していると考えられる。

★ 堀川



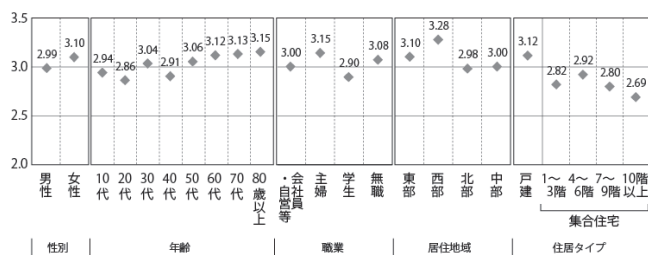
那古野地区は堀川掘削を起源としており、堀川は地域の重要な魅力資源と位置づけられている。実際に住民はどの程度堀川が存在を重要視しているのだろうか。

この項目の平均値は3.05と「江戸時代から続くまち」に近い値となった。

年齢別に見ると、年齢が高くなるにつれて重要度が大きくなる傾向にあり、その程度も大きい。特に10代と20代の値が低くなっている。年齢によって堀川の歴史的背景等についての知識が異なることや水辺空間と親しむ機会がかつてほど多くないことなどが原因として考えられる。

次に居住地区別に見ると、東部が突出して高く、次いで北部、中部、西部となっている。ここでも堀川が最も近くにある東部地区の回答者にとって、最も重要性が高く認識されている。

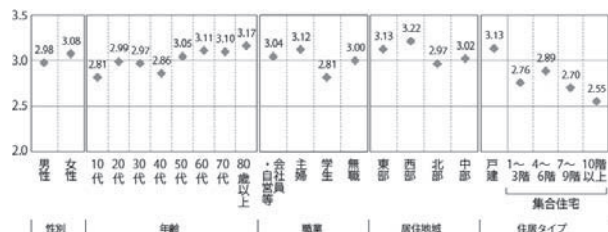
★ 学区としてのまとめ



平均値は3.05と比較的高く、また、標準偏差について0.89と、「学校やコミュニティセンター等の公共施設」と並んで二番目に小さい数値となった。こうしたことから、回答者に共通して「学区」単位でのまとめが重要と認識されていることがうかがえる。

年齢別に見ると、「学区」に関しては高齢層ほど重視している。また、戸建住宅居住者に比べて集合住宅居住者の評価は相対的に低く、中でも居住階数が高くなるにつれて重要度が低くなる傾向がみられる。

★ 近所づきあい



平均値は3.04と比較的高く、標準偏差も0.90とあまり高くないことから、回答者全体として近所づきあいを重要視していることがわかる。

年齢別に見ると、概ね年齢に比例して値が高くなる傾向にあり、年齢を重ねるにつれて近所づきあいを重要視するようだ。

戸建住宅居住者のほうが集合住宅居住者に比べて高い値となっている。また、「学区としてのまとまり」同様、集合住宅居住者のうち、高層階居住者の値が低くなっている。

★ 古くからの祭り

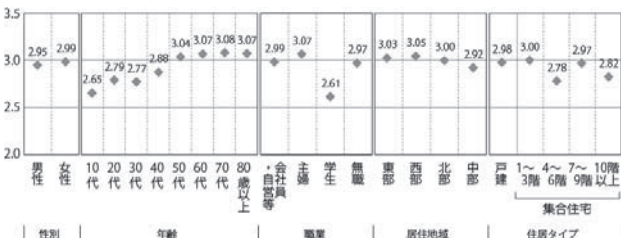


平均値は3.01であり、比較的重要なものとして認識されていることがうかがえる。

居住地区別に見ると、北部地区のみで低くなっているが、この地区では大規模な祭がなく、そのことが重要度に影響しているかもしれない。

年齢別に見ると年齢が高くなるにつれて重要度が低くなる傾向が見られることから、若年層のほうが祭典などを重要視していることがわかった。

★ 昔の地名

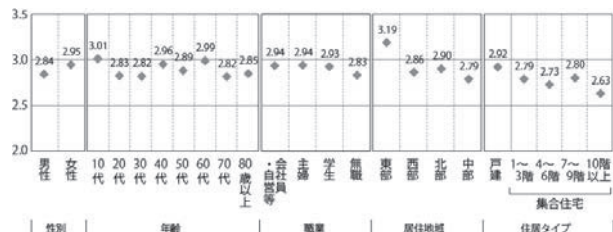


那古野地区は旧来の複数の村の集合体となっているが、町名変更(那古野学区周辺では昭和52年～56年に実施)を経た現在では、その名残が町内会の名称や街路名・交差点に見られるに過ぎない。

しかし、この項目の平均値は2.95と全体平均値を上回っており、標準偏差も0.90と低いことから、昔の地名をある程度重視していることがうかがえる。年齢別に見ると、概ね年齢に比例して重要度が高くなる傾向が見られ

る。町名変更の時期や町内会への参画状況などを考慮すると、若い世代は旧町名に馴染みが薄いものと考えられる。なお、居住地区ごとの意識差は少なかった。

★ お地藏さまやほくらなど



平均値は2.90であり、「お寺や神社」よりも低くなったが、標準偏差については「お寺や神社」よりも大きい。

ここでも多くの屋根神様や道祖神などが現存する東部地区で高い重要度を示し、身近なものほど重要と認識されているようだ。

★ 大きな木や神木



規模の大小で「大きな木や神木」と「樹木や身近な緑」に分類しているが、ここではシンボリックで規模の大きなものについて聞いている。この項目の平均値は2.91とほぼ全体平均と同じ値であったが、標準偏差が大きく、回答者間での意識差があることが分かる。

学区内で唯一市指定の保存樹がある東部の評価が突出して高かった。また、女性や主婦にとっての重要度が高くなっている。これは「お寺や神社」、「公園や広場」、「樹木や身近な緑」についても同様の傾向があり、女性にとっては緑の重要度が高いことが分かる。

★ 町内会・子ども会などの地域活動

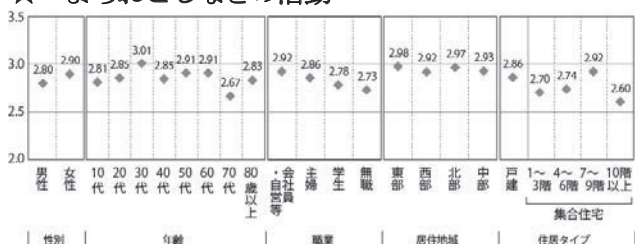


平均値は2.89と全項目中下位に位置し、重要度が高い「近所づきあい」に対する意識との差異があるようだ。

特に10代による評価が高いなど、他のコミュニティ要素と比べて若年層の評価が高い点が特徴的である。また、住宅のタイプ別に見ると、前項と同様の傾向がみられ、

高層階居住者間でのコミュニティに対する意識の同質性がうかがえる。

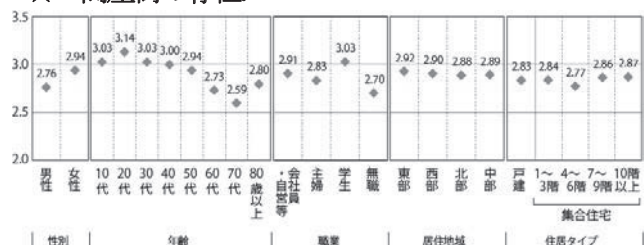
★ まちおこしなどの活動



調査地域内では商店街や四間道地区の活性化に向けた活動が展開されており、中でも2010年には長編映画「WAYA!」の撮影が行われるなど活況を呈している。

しかし、この項目の平均値は2.86と全体平均を下回っており、あまり重要とは考えられていないようだ。

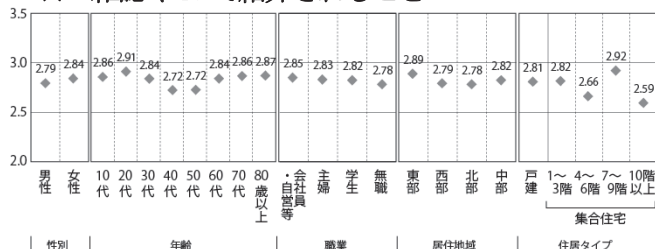
★ 間屋街の存在



平均値は2.85と前項目中でも下位に位置する。

職業別に見ると、学生を含む若い世代からその親世代にわたって間屋街の重要性が認められているのに対して、それ以上の年代となると評価が漸減する傾向が見られる。

★ 雑誌やTVで紹介されること

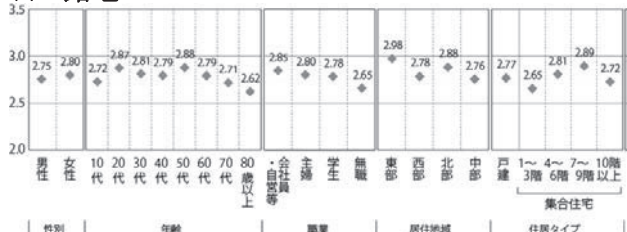


近年、那古野学区周辺がメディアに取り上げられることが増えてきた。こうした状況を住民はどのように捉えているのか。

値を見てみると、この項目の平均値は2.80と他項目と比べると重要度が低くなっている。

年齢別に見ると、概ね評価が一定ではあるが、敢えて言えば20代の評価がやや高く40代～50代の評価が低めとなっている。

★ 路地



平均値は2.79となっており、大通りとはほぼ同様の低い評価となっており、学区内において「みち」はあまり重視されていないことが分かる。居住地区ごとに見ると、東部地区が高くなっており、この地区にある四間道周辺の路地に対する意識が重要度に反映されているようだ。

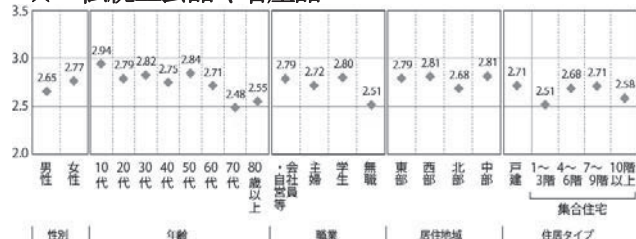
★ 大通り



平均値は2.76と低い。標準偏差も小さく、学区内での「大通り」の重要度は低いことが分かる。

中でも、西部・北部＞中部＞東部という評価の傾向がそれぞれの接する幹線道路幅員と反比例する点が興味深い。

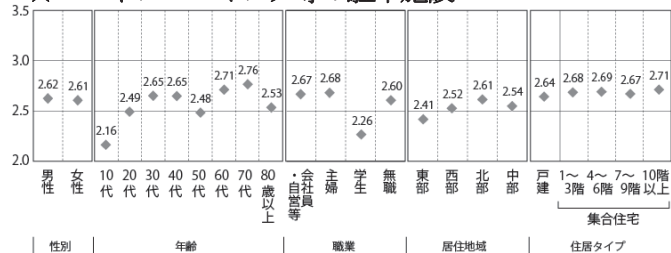
★ 伝統工芸品や名産品



平均値は2.73と全項目の中でもかなり低いが、標準偏差の値も1.02と大きいことから、回答者間での意識のばらつきは大きいようである。

年齢別に見ると世代が高くなるにつれて重要度が漸減する傾向があり、若年層ほど高い重要視する傾向がある。また、居住地域別では北部地区だけがやや低い評価となっている。

★ コインパーキング等の駐車施設

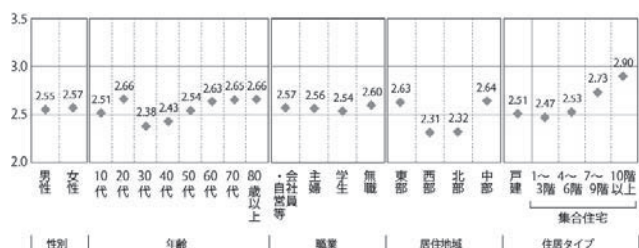


平均値は2.61と全項目中3番目に低い値であり、標準偏差も1.02と大きく、回答者間の意識差が大きいことがうかがえる。

他の項目では女性のほうが高い重要度をつける傾向にある中で、この項目は男性の評価が女性を上回っている。男性にとっては、駐車施設の重要度が高いようである。また、居住地域別に見ると北部地区がもっとも高い。これ

は、鉄道駅から離れていることから、自動車への依存度が高いためと考えられる。

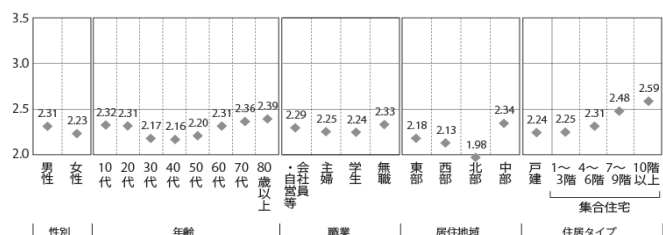
★ 超高層ビル群の眺め



都心部にある遠景としてのビル群を対象とした項目で、平均値は2.54と全項目中2番目に低く、標準偏差の値も全項目中最も大きく、回答者の意識のばらつきが大きいことがうかがえる。

この中でも、住居タイプ別の傾向は特徴的であり、7階以上の居住者については居住階が高くなるにつれて重要度が高くなる。

★ この地区の高層マンションやビル



平均値は2.26と全項目中で最低値であり、この地域の住民にとって、近隣の高層建築物の重要度は低い。

また、居住地域による意識差が大きく、特に3階~10階の建物が多い北部地区において近隣の高層住宅の重要度は低い。

(3). 属性別の傾向

回答者属性ごとに見られる傾向について以下に概括し、本項のまとめとしたい。

★性別

全体的に女性の方が男性よりも高い評価をしている傾向が見られる。とりわけ、緑に関する項目についてはその傾向が強く見られた。なお、そうした傾向がみられないものとして、高層住宅や駐車施設などがある。

★年齢

年齢が高くなるほど評価が高くなっているものとしては、昔の地名や堀川、また近所づきあいなどが挙げられる。高年層と若年層との間で認識の異なる歴史的要素があるようだ。また、ローカルなコミュニティ

については年齢に比例して評価が高くなる傾向があるようだ。

★職業別

会社員・自営等は歴史的要素を高く評価している傾向が見られた。また、主婦についての評価が高いものとしては、緑やコミュニティなど地区内での生活環境に関するものに対する重要度が高い。学生については、全体的に大学生・専門学生の評価がとりわけ低い傾向が見られる。無職層についても、全体的に低い評価をしている傾向が見られるが、高層住宅については比較的高い評価をしており、都会的な要素をある程度肯定的に捉えていることが分かる。

★居住地区別

東部地区については、古い木造家屋や路地、お地蔵様やほこら、江戸時代から続くまち、堀川など歴史的要素の高いものを重要視する傾向が見られた。いずれの項目も東部地区に立地・集積し、四間道とかわりの深い事物となっている。

西部地区については、学校や公共施設、公園、学区としてのまとまり、近所づきあいなど公共施設やコミュニティに関連する項目の評価が高い一方で、歴史的資源に対する評価が相対的に低くなっている。

北部地区については重要度の高いものも低いものも他地域と大きく傾向が異なり、同じ学区内においても広幅員街路による地域分断が起こり、地域資源に対する意識差が生じていることがうかがえる。

中部地区では相対的に高層住宅に対する評価が高い一方で、古い木造建築物や寺社仏閣、昔の地名などに対する評価が低い。地理的に那古野学区の中心に位置しながらも歴史的要素の評価が低く都市的な要素の評価が比較的高い点が特徴的である。

全体的な傾向として、それぞれの地域に存在する要素を重視する傾向が見られ、地域資源と居住地の近接性に相関性があるものと思われ、特にその傾向は建造物や空間、モノといった物的要素に関して強いようだ。

★居住地区別

全体的な重要度の数値については戸建住宅居住者と集合住宅居住者との間に大きな差がない。

強いて言えば、戸建住宅居住者はコミュニティや地域的なまとまりに関する要素を重要視する傾向がある一方で、集合住宅居住者は高層建築物に対する評価が高いことが読み取れる、都心との近傍性や都会的な環境に対する重要性は集合住宅居住者のほうが評価しており、しかも居住階が高くなるにつれてその傾向が強まることが分かる。

3-4. 「好きな場所」にみる空間的まとまり

(1). 「好きな場所」の指摘数

今回の調査では、回答者の「好きな場所」について、地図中に○を付す形で自由に記入してもらうとともにその理由を記入することで、学区住民の意識を集約した。

ここで得られた「好きな場所」の状況について、その地理的な分布状況を見るとともに、指摘された具体的な対象の把握や住民との関係に関する分析から好きな場所がどのように認識されるのか、その構造について考察する。

具体的には、回答者にアンケート用紙にある地図上の「好きな場所」を自由に囲んでもらった。そして、ここでは、囲まれたエリアを街区単位に置き換え、有効指摘数に対して当該街区が何回「好きな場所」のエリアに含まれたかを算定した。(図5)

この結果、四間道やその東に位置する美濃路周辺に多くの指摘が集中していることが分かる。なお、指摘数の割合の1.0%で全回答者の約20%の人が指摘している計算になる。美濃路東沿いの街区には全回答者のうち30～40%、県の重要文化財である川伊藤家や青木家、蔵を改装したレストランなど並ぶ四間道と美濃路に挟まれた街区には実に70%以上、古民家を物販店等に改装した四間道西沿いの街区には30～50%の回答者が好きな場所として指摘しており、四間道を中心とした街区に集中していることが明らかとなった。さらに、四間道から円頓寺商店街、円頓寺本町商店街へと続くエリアも指摘割合が高い。この商店街周辺街区については少なくとも全回答者のうちの20～50%の人が好きな場所として挙げている。

次いで、江川線を挟んで西側に位置する円頓寺本町商店街周辺も指摘割合が高くなっている。円頓寺本町商店街に沿って南北の街区に指摘が集中しており、那古野小学校のある街区にも及んでいる。

また、那古野学区からは外れるものの、地域の北部にあたる新道二丁目も指摘割合が高くなっている。このあたりには菓子や玩具を扱った問屋が多く集積する地域で、10～20%の回答者が好きな場所として挙げている。

これらの点から、学区内には四間道～円頓寺商店街周辺、円頓寺本町商店街～那古野小学校周辺、問屋街周辺の3つが「好きな場所」の集まったエリアということがわかった。

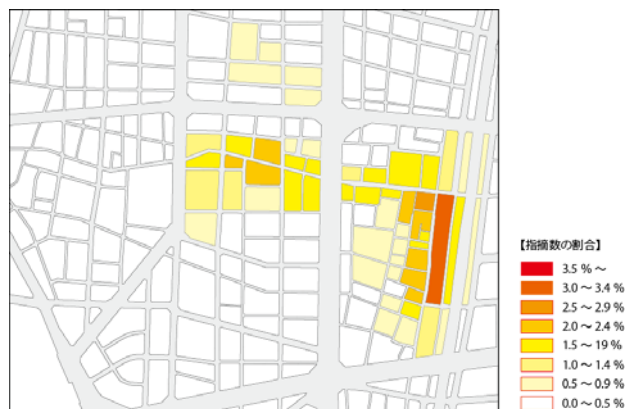


図5 指摘数の分布状況

(2). 指摘形状による指摘数の補足

囲まれたエリアに街区が多く含まれる場合と、少ない場合とで街区に対する「好きな場所」という思い入れの強さが異なることが想定されるので、思い入れの強さを考慮した形で指摘の数を集計したい。すなわち、指摘一つあたりの点数がちょうど1となるよう、指摘の範囲内にある街区ごとに点数を割り振った。(たとえば、一つの○に4つの街区が含まれている場合は、各街区に0.25、2つの街区が含まれる場合は0.50ずつ割り振られる。)そして、これらの数値を集計し、そこに占める割合を指摘値としてまとめた。(図6)

この結果、指摘値の割合が3.5%以上となっている街区として、那古野小学校がある街区、四間道と美濃路に挟まれた街区が浮かびあがってきた。

この二つの街区は「好きな場所」として明確に特定できる街区といえよう。

また、このほかにも、問屋街の立地する新道二丁目南東部や新道中央公園のある街区、名古屋駅のある街区や名古屋プライムセントラルの立地する街区、さらには、早苗公園のある街区、旧新明小学校のある街区、国際センターのある街区についても高くなっており、特徴的な施設や高層建築物、公園、公共施設、交通施設のある街区が明示される傾向がある。

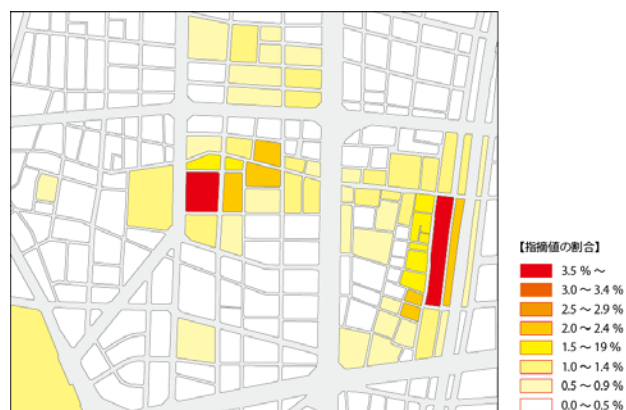


図6 指摘値の分布状況

(3). 指摘理由の分析

ここでは、マーケティングなどに利用される「共起ネットワーク」という手法を利用し、那古野小学校と四間道周辺に関して、それぞれの自由記述欄から文章を構成する単語の出現数およびほかの単語の関連性を可視化してみる。

①. 那古野小学校所在街区(図7)

出現数の多い語とそのまとまりについて見ると、「春」「桜」といった語のまとまりが把握できる。この「桜」とは、那古野小学校の敷地内に存在する桜の木だけでなく入学式や卒業式など、新しい門出の象徴として桜のイメージが作用しているものと考えられる。また、元気に遊ぶ姿に対する記述、声が聞こえることに対する記述など、動詞が多く見られることから、人の営みやにぎやかさに対する思い入れが強いことがうかがえる。

こうしたことから、那古野小学校については施設の存在だけではなく地域における生活の記憶を呼び起こすものとして「好きな場所」として多くの指摘を集めたことが分かる。回答者の多くが昔から学区内に居住しており、それぞれのライフステージにおいて那古野小学校と何らかのかかわりを持ってきたが、こうした結果に繋がっている。

なお、この街区には第三幼稚園、消防署・交番などがあるが、とりわけ第三幼稚園とともに指摘されているケースが多く、住民の意識の中で幼稚園と小学校が一体となっていることが分かる。



図7 那古野小学校のイメージ

②. 四間道東沿い街区(図8)

この街区については「古い」「町並」「みる」の出現数が非常に高くなっており、それらの語が一連の文章として用いられていることが多い。この中には、屋根神様や堀川、円頓寺商店街、子守地藏尊に関する語も多く見られ、学区住民の間で近隣街区との一体性が認識されていることが分かる。これらの点から、この街区が非常に高い指摘値となっていたのは、さまざまな要因が重なり合う場所であったによるものであろう。

つまり、ここで見られる住民の意識は、四間道を中心とした周辺一帯に対するものと考えられ、とりわけ川伊藤家や青木家が立地するこの街区を象徴として「四間道周辺」の町並みや新規店舗の出店などを好きな場所として肯定的に捉えているようである。

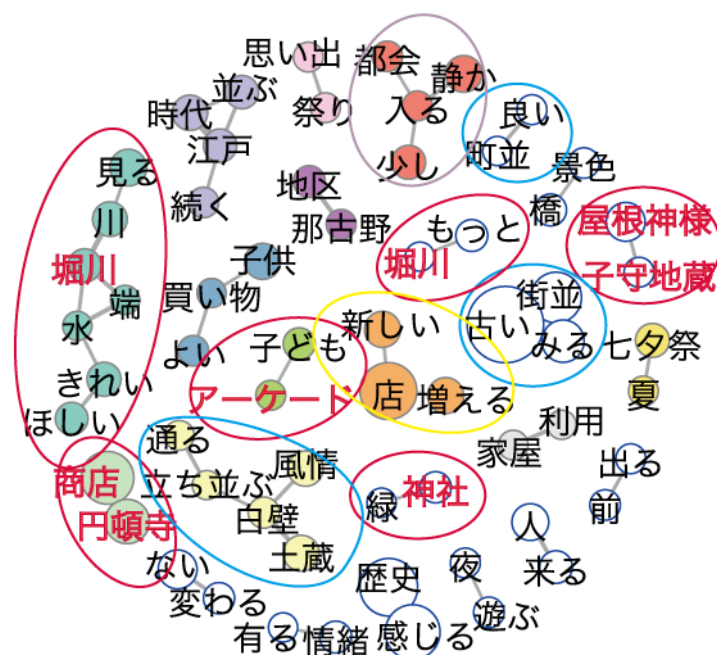


図8 四間道のイメージ

4. まとめ

前章では、「好きな場所」として空間的なまとまりを明確にし、さらに「好き」という意味合いの中に、日常生活や思いが密接に関わりあっていることも示した。(図9)そこで、ここでは、得られた空間的なまとまりを“界限”として定義する。

4-1. 那古野“界限”

那古野地区では、広幅員街路で区分された三つの“界限”が確認された。それは、①. 四間道沿道からその西方、②. 那古野小学校周辺、③. 問屋街周辺の各“界限”の概要は以下のとおりである。

①. 四間道界限

四間道周辺では、円頓寺商店街との接点から浅間神社にかけ、近年整備された道路の舗装や蔵の外壁が統一感を演出しており、一体的な空間形成が進められている。また、四間道から西方にかけて、古い町屋の並びや趣のある路地や多くの家に見られる植栽などにより雰囲気が演出されており、これらが連続することによって一体的な空間形成がされている。

②. 那古野小学校界限

小学校の周辺には幼稚園や消防署などの公共・公益施設が集積しており、こうした施設との一体性が確認された。こうしたまとまりが空間的にも、また、日常生活の場所としても認識されていることがわかる。

③. 問屋街界限

北部の問屋街周辺も街区のまとまりが見られる。この地域については、同様の業態が集積し独特の雰囲気が醸し出されている。

4-2. “界限”と道

“界限”の形成には「道」が大きく影響しているようだ。広幅員街路は“界限”を区分するものとして作用し、また、細街路などは逆に“界限”性を強めるものとして作用していることがわかる。特に細街路については、地域資源の重要度における「路地」の項においても、四間道界限が位置する東部地区では相対的に高い重要度を示していたが、それは身近な「道」は日常生活の場であり、また、建物との親密感を醸し出す空間形成にも寄与

していることから、“界限”性を演出する大きな要素となっていると考えられる。

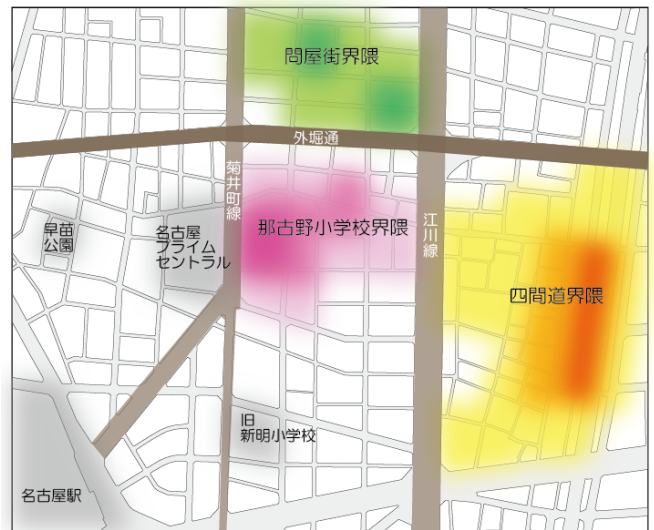


写真 A ①.四間道界限



舗装が新しくなった四間道



古民家を改装した店舗

写真 B ②.那古野小学校界限



那古野小学校のファサード



那古野小学校の校庭

写真 C ③.問屋街界限



駄菓子問屋



玩具問屋

4-3. “界限”とまちづくり

最後に“界限”を活かしたまちづくりの視座を整理したうえで、那古野地区におけるまちづくりの方向性を展望したい。

(1). “界限”を構成する地域資源のあり方

調査の結果、小学校、商店街、四間道、問屋街などの周辺が“界限”として認識された。これらは、地域を特徴付ける地域資源であると同時に、住民の日常生活に密接に関わっているものである。

こうした点を踏まえ、これらの地域資源の保存・活用に向けた機運の醸成や、ファサードや意匠、古い建物の連続性を確保するなど、周辺を一体とした空間整備を行う必要がある。また、その際には、地域における日常生活と親和性の高い空間を形成するという視点が重要である。

(2). 原風景の継承

那古野小学校界限に見られるように、人々の生活や活動を通して、意識の中で“界限”が形成されることが確認されており、核となる物理的要素のみならず、“界限”の領域に含まれる人の営みも“界限”を構成する要素として重要な役割を果たしていることがわかった。

また、「学校やコミュニティセンター等の公共施設」や「広場や公園など」といった、人が集まる物理的施設、「古くからのお祭り」などに対してある程度の重要度が認められていることから、地域の歴史や地域活動を継続していくことが大切であり、こうした取り組みを通して地域の原風景を守っていくことが必要となるであろう。

(3). 地域資源の保全

今回の調査研究では、学区周辺における「好きな場所」の指摘の集計によって三つの空間的なまとまりを“界限”として表現したが、その一方で、小さな神社など、一般的にはあまり認知されていないものの、近隣に住む少数の人たちが強い愛着をもっているような地域資源の存在も確認された。また、「樹木や身近な緑」のように、それぞれの住民によるものに対しても重要度が高いとされたことなどから、規模が大きく、一般に広く認知されているような要素のほかにも地域にとって大切な資源があることが分かった。

こうした小規模な地域資源は、行政や企業による直接的な事業の対象となりにくいため、地元住

民による自発的な取り組みによって保全していくしかないと考えられる。こうした点を考慮すると、小さな地域資源については、地元の人々が、神社の清掃や植栽の手入れなどの日常生活を通して保全していくことがもっとも適切であるが、行政としても、そうした活動の継続や運営が円滑となるような制度の創設など間接的な支援ができると望ましい。

(4). コミュニティを大切にしたまちづくり

“界限”とは、物質的な空間と人々の営みが一体となって醸し出される空間概念である。

こうした点を考慮すると、那古野地区は「学区としてのまとまり」や「近所づきあい」などのコミュニティを重要と考えており、こうした認識が地域の生活に反映されていることによって、この地域ならではの“界限”の形成に寄与しているものと考えられる。

したがって、今後もこの地域を特徴付ける“界限”を継承・発展させるためには、幅広い住民の参加により、この地域をどうしていくのか考え、地元発意型のまちづくりを展開していくという視点が大切である。

おわりに

本研究では、那古野地区を対象として、物理的要因や各種データの現況把握や住民意識の調査、また、その分析により、那古野地区を立体的に考察することができました。おそらく、当地区において、こうした研究がなされたのは初めてであり、今後の政策やまちづくり活動にある程度有用なデータを作成することができたと考えています。是非とも、今後の政策立案や地域における調査の参考としていただければ幸いです。

本研究には、地元の皆さまの協力のもとで成り立っております。特にアンケート調査を行った際には区政協力委員の皆さまをはじめとして、非常に多くの方々のご協力をいただきました。この場を借りて厚く御礼を申し上げます。

また、同時に名古屋市の様々な部署の職員の皆さまにご協力をいただきました。特に、西区役所区民生活部の皆さま、住宅都市局歴史まちづくり推進室の皆さまには、この場を借りて感謝の意を表します。

最後に、この研究は名古屋大学大学院 小松研究室との共同で進められたものであり、壁に当たるたびに辛抱強くご指導いただいた小松先生、また、ともに夜遅くまで「運命共同体」として研究に取り組んでいた小久保さんにも、感謝の意を表します。

名古屋都市センターが、名古屋のまちづくりや都市計画行政の課題を先取りした研究テーマを設定し、必要に応じ、名古屋市職員や学識者などとも連携して調査研究を行い、報告書としてまとめたものです。

No.094 2011.3 | 研究報告書

まちの“界限”分析 ～那古野地区に焦点を当てて～

平成 23 年 3 月

発 行



名古屋都市センター

〒460-0023

名古屋市中区金山町一丁目 1 番 1 号

TEL / FAX 052-678-2200 / 2211

<http://www.nui.or.jp/>

この印刷物は再生紙を使用しています。